

右舷灯



北海道室蘭で育ち、中学の修学旅行は仙台だった。蒸気機関車に曳かれて函館まで行き、青函連絡船で津軽海峡を渡り、再び列車で行く長旅だった。友達との旅は楽しいが、とても長い行程だった。この唯一の交通手段に海路が加わったのは、1970年

代で、小樽、苫小牧、釧路からフェリーでの移動が可能となり、さらに航空機での移動も急速に普及した。現在では、航空が86%、フェリーが8%、鉄道が6%となり、大多数が航空機を利用している。中学の修学旅行でも飛行機を利用する学校が増えているという。こうした中で、修学旅行にフェリーを活用する試みが注目されている。中学校の先生と修学

旅行の手配会社の社員のためのファムトリップ(研修旅行)に講師として同行する機会に恵まれた。苫小牧港での海上物流の見学、パイロットと船長の仕事の話を聴いてから、仙台行きフェリー「きたかみ」に乗船。展望浴場で汗を流して、レストランで夕食をとり、同行者と歓談してベッドに入る。目覚めると

修学旅行

船は金華山沖を航行しており、北海道や北米に向かう船とすれ違ふ。朝食をとると、仙台港に入港。石油基地には大型タンカー、穀物埠頭にはバルクキャリア、RORO埠頭にはROROR貨物船、コンテナターミナルには小型コンテナ船が荷役しているのを見ながら、一番奥近くに位置するフェリー埠頭に到着。

ここでも、なかなか接する機会がない海事産業を見学できた。今、中学校では、国連の推奨するSDGsすなわち持続可能な社会の実現に向けた教育にも力を入れている。そうした中で環境負荷の小さい輸送機関である船舶の役割はたいへん大事になっている。飛行機やトラック輸送を船舶輸送に移せば80~90%のCO₂削減ができる。

では、フェリー利用の旅客移動によるCO₂削減量はいくらなのか。国の資料を探したが、この回答は見つからなかった。実は、フェリーはトラック輸送が中心で、旅客を乗せても燃料消費はほとんど増加しない。すなわちCO₂排出はほぼ100%削減できるとも言え、SDGsの優等生なので教育効果も高いこととなる。